

八十八歳のきのこ人生

一 八十八歳の手習いとは一

翁茸 (古川 久彦)

西洋のことわざに、It is never too late to learn. というのがあります。これを日本流に言うならば、六十の手習いになるのでしようが、八十八歳のわたくし流に言うのであれば、八十八歳の手習いになるのでしょうか。いずれにしても、世界の万人が「学問をするのに、齢を取り過ぎているということはない」と言っているのですから、齢 88 歳の老翁だからと言って、とくに気にする必要はないと思ひ体調の具合に応じて適宜頭を使っています。とは言っても世の中は不思議なもので、この老翁が何かを始めようとする、「あの人もいよいよ認知症が始まったよ!」と軽蔑の眼で見ている業界の仲間もいるし、また「あの爺さんだから俺たちも協力しようよ!」と言って励ましてくれる若手の研究者たちもいて、時と場合によっては冷風・温風と様々な風に晒される立場になったので、その辺りは適宜に考えながら暮らして行くのが今の世の中だと思っています。

ところで、この齢になった私が一体なにを習おうと考えているのでしょうか。まさか、数学や語学であるとは誰も思わないでしょうし、またそれを習うとしても受入れるだけの能力はもはや無くなってしまいました。でも、いま盛んに話題になっている分子生物学や分子遺伝学についてはもう一度基礎から復習したいと思ひていましたが、例えそれを始めたとしても最後まで続けて行く事はお

そらく出来ないでしょう。もう、それに耐え得るだけの知力と体力が減退しているからです。

他の基礎学である菌類分類学や菌類生理学などについても同じような気持ちは持っていました。最近になってここで無理して残された大切な時間を費やすよりは、もっと他の事に使った方が良いのではないかと思うようになりました。というのは、学会に出席して若い人たちの研究発表を聞いていても、また学会誌に投稿された論文を読んでも、彼らが言わんとしている趣旨のおおよそは何とか理解できると思っていますので、これからは辛うじて残っているこの能力を上手に使って生きて行く方向もあるのではないかと思うようになりました。

さてそこで、八十八歳の手習いの在り方を考えて見ることにします。私は、若い頃からのこの齢になるまでの長い間、きのこの研究とその生産と普及の仕事に関わって来ましたので、何時も頭の中にあるのはきのこと言う生き物の事です。中でもとくに關心を持っているのは、自然生態系の中におけるきのこ(菌類)の存在です。地球上の生物界は、植物・動物・菌類の三者の調和によって平和が保たれていると言う自然生態観にはそれなりに納得していますが、何故か最近になってまた余分な事を考えるようになりました。それは、植物も動物も菌類も何れも生き物です。

生き物（生物）である以上は生命（命・いのち）を持っています。生命とは、生物が生きている限りは持ち続けるものであって、総ての活動の源泉になるものです。

したがって、どのような生物であっても、生きていく間には必ず身体に変化が現われてきます。これが成長であり、また時による変異であるのです。成長の場合は生物としての正常な変化ですから、その個体が持っている遺伝子には異常はありません。しかし、変異と言うのは同じ種類でもその個体間に現われる形態的・生理的な差異をいうのですから、明らかに遺伝子には異常が認められません。

問題はこの変異にあるのです。とくに突然変異と言うのは、親の系統にはなかった形質が突然子の形質に現われて、それが遺伝する現象ですから、何時何処でそれが生ずるのかは全く分かりません。もしも自然生態系の一員である菌類に突然変異が生じて元来もっていた形質が変わったとすれば、自然界の調和は一体どうなるのでしょうか。長い間調和が保たれていた自然界の中に、今までと異なった性質の菌類が作用する訳ですから、何らかの影響が出るものと考えるのが当然だと思います。ただ、ここでは菌類という大きな生物体を指していますが、これを菌類の中の一つの種に置き換えて見ても、同じような影響が出るに違いありません。ただこの影響は、広い面積に渡って明確に現われる事もあるでしょうし、また部分的に不明瞭に現われる事もあるでしょう。したがって、人の眼には映らない場合もあるかも知れません。しかし、そこには眼には見えない程の小さな影響がある筈です。そして、この小さな影響が長い年月の間には起因となって大きな被害に発達する可能性は十分に考えられます。

若しもこのような影響が森林に現われた場合にはこれを森林被害と呼び、害の主因が病気であれば森林病害、虫であれば森林虫害、

また獣類であれば森林獣害と言っているのだと思っています。

この考え方は、私自身が自然林の中で実験的に確認したものではありませんが、長い間関わって来ましたきのこの育種や登録品種の系統保持の室内実験の中では、予期せぬ時に生じた変異現象にてこずっていた事を考えると、自然界においても生物の変異に関わる影響は常に何処かで起きているものと思っています。ただ、それが人の眼で確認出来るまでに発達するにはかなりの時間を要すると思いますし、また人眼には付きにくい様相を呈する場合もあるでしょうから、若しかしたら見逃していたかも知れません。何れにしても私は、自然界に菌類が棲息している限りは、その変異によって長い年月の間には何処かで何らかの影響が現われるものと考えています。また、それが菌類ではなくて植物や動物であっても生き物である以上は変異は免れない筈ですので、やはり何らかの影響は現われるものと思っています。

この稿の表題に掲げた八十八歳の手習いとは、実はこの考え方を何らかの方法を用いて実験的に確認したいと言うのがその目的でした。そして、出来れば残された余命があるうちに何とかしたいと思ってあれこれと思案していますが、何分にもこの老体ではどうにもならないのが実状です。

若しも私のこの考え方に関心をお持ちの方がおられましたら、是非ともご意見をお聞かせ下さい。

E-mail: okinatake @ cpost.plala.or.jp
でお待ちしています。よろしく願いいたします。

(2016.06.08 稿)